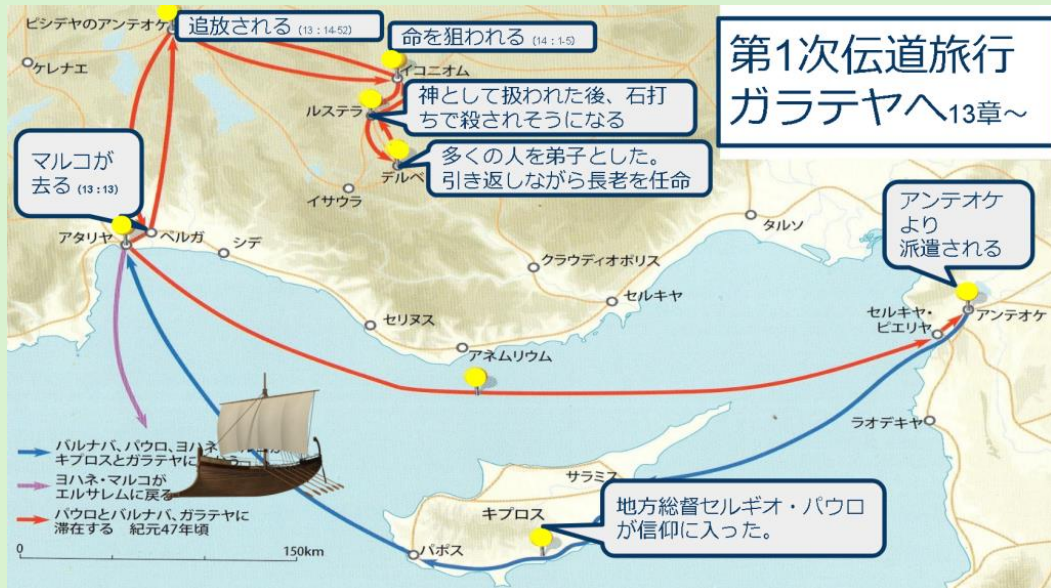


豊明希望チャペル礼拝

2026/8/2

「万物を創られた生きる神」

使徒の働き 14 : 8～18



エルサレム教会の決定により、アンティオキアの教会から、異邦人伝道を目的に遣わされた、パウロとバルナバの伝道の旅は、キプロス島から始まり、小アジアのペルゲ(ペルガ)さらには、内陸のピシディアのアンテオケへと続きます。そこまでは、ユダヤ教の会堂で、彼らが福音を語ったのですが、地図にあるように、イコニウム(イコニオン)へ、ルステラ(リステラ)へと、迫害されて移動し、福音を語るうちに、次第に、ユダヤ人以外の、おもにギリシャ人なども救われるようになってきました。前回の箇所を読みます。

「14:1 イコニオンでも、同じことが起こった。二人がユダヤ人の会堂に入って話をすると、ユダヤ人もギリシア人も大勢の人々が信じた。」

13章では、イスラエルの皆さんと語りはじめ、モーセ以来のユダヤの歴史の中に現された神の御心を説いたパウロらでしたが、その語る内容も、異邦人に向けて、異邦人もユダヤ人も同じルーツであるはずの、アダムとイブから、すなわち、人間の創造の初めから、すなわち、「**天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生きる神**」から語り、キリストの福音を説くことになりました。

早速ですが、読んでいただいたように、今日の箇所の後半を今一度読みます。

「14:15 「皆さん、どうしてこんなことをするのですか。私たちもあなたがたと同じ人間です。そして、あなたがたがこのような空しいことから離れて、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。14:16 神は、過ぎ去った時代には、あらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むままにしておられました。14:17 それでも、ご自分を証ししないでおられたのではありません。あなたがたに天からの雨と実りの季節を与え、食物と喜びであなたがたの心を満たすなど、恵みを施しておられたのです。」

たしかに、ここからこそ、本当の意味で、異邦人伝道が始まったのです。

そして、この 15 節の直前にあるように、異邦人の向けに、このように創造の神さまから語り始めたとき、ユダヤ人にキリストの救いを語ったときと同様に、大きな反応がありました。いや、ユダヤ人に語った時以上の、聖霊の働きがあつて、大きな反応、応答をもって受け入れられました。その受け入れ方は異常なほどでした。すなわち、パウロとバルナバを、ギリシヤの神々のように騒ぎ立てたのです。

「14:12 そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人だったことから、パウロをヘルメスと呼んだ。14:13 すると、町の入り口にあるゼウス神殿の祭司が、雄牛数頭と花輪を門のところに持って来て、群衆と一緒にいけにえを献げようとした。」と。



少し、脱線するかも知れませんが、長い鎖国の時代を経て、明治に入り、前にも触れましたように、江戸時代以来の、切支丹禁制を、全国の道の辻辻にある、高札を建て直して、あらためて、命じたのです。外国の圧力もあつて、明治

6 年には高札が撤去されますが、当時の資料を見ますと撤去する理由は、高札の内容、すなわち、キリスト教を禁じるという命令が、周知徹底したので撤去すると書かれています。すなわち、キリスト教を禁じる政府の方針は、変わってないぞと言っているのです。

各地方の図書館に行きますと、昔の新聞の縮刷版を見ることが出来ます。だいたい明治 20 年頃からの新聞を見ることが出来ます。私もあるとき、図書館に行つて、奥にある図書室から、図書館の司書の方に、何度か往復して運んでいただいて、長くいて、目を通させていただいた事があります。大正時代頃まで見ましたでしょうか。そして、こんな記事を見つけました。明治 21 年の新聞（明治 21/9/30 東京朝日新聞）の社説に、「基督教公許の建白」と言う題で、その冒頭にはこのように書かれていました。その高札の撤去から 14 年後の新聞です。意外な記事に驚きました。

「キリスト教は今や天下にはびこれり。キリスト教の名は津々浦々のはしに至

るまで及ばざるなく、アーメンの声は、水村山郭（すいそうさんかく）皆、これを聞けり。その洗礼を受けたる者、すでに 3 万余人と称す。その盛んなるや、キリシタンとあざけり邪宗門と退けたる（當年）その頃の事は、はや過去の夢のようだ・・・」と。2 年後には帝国憲法が發布されますが、新聞の社説では、「国がキリスト教を許可するなどという動きがあるが、国が許可するとか許可しないということ自体が間違っている。これから出来る憲法は、宗教は自由だという方向でつくってもらいたい・・・」と書かれています。

勢いから言ったら、国がキリスト教を許可するという程に、前向きのものでした。当時の教科書を見ると、一時、神が天地万物を生じさせたという記述さえ見る事が出来るのです。明治 6 年に文部省から発行された「小学読本」には、なんと、「天津神は、月、日、地球を造り、のち、人、鳥、獸、草木を造りて、人をして諸々の支配をなさしめたり。」「神は万物を創造し、支配したもう絶対者なり。」)とあるのです。すぐに撤回されますが、その勢いの凄まじかったことをみることが出来ます。明治から大正に至る新聞の本の宣伝欄に、ドイツの神学者のシュライエルマッハーなどの、今では誰も読まないような本が大きく宣伝されているのです。

今日の聖書の箇所、パウロが、「**14:15 「皆さん、どうしてこんなことをするのですか。私たちもあなたがたと同じ人間です。そして、あなたがたがこのような空しいことから離れて、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。」**と、天地万物を創造した神を伝えたとき、小アジアの異邦人達、ギリシャ人達が、一気に神さまを信じようとした事と重なるようで、単に、教えの内容の新鮮さというだけでは説明しきれない、神の大きな働き、聖霊の働きを感じるのです。

ただ、その後、どうなったかという事ですが、国の迫害は、明治以前のことでありはなしで、明治政府の富国強兵、天皇崇拜、教育勅語などの強調強制に伴い、次第に勢いを失っていきます。明治が、大正、昭和となり、昭和の 20 年に至るにあたっては、がっつりと教会の中にまで、その影響力が及びます。教会堂は、各地で、銃の弾をつくるために解放され、日本基督教団名で、零戦を国に寄附します。兄弟姉妹にとってはショックかも知れませんが、一度、どこかで紹介した方がいいと思っていたので、少し長いですが、言います。キリスト教の教会学校の教案。当時の教会学校の教案『教師の友』（今もある・・・）1944 年（昭和 19）12 月、1945 年 1 月に、こんな事が書かれています。その週の教案の題は、「献身」です。CS の教師は、ローマ 12:1 から話なさいと指示されています。そして、このように解説されています。「子供が献身するということは、神を拝み、神に祈り、神に従い、神を信じる立派な皇国の子供となることを具体的に実践的になるように教えること。日本国民は遠い昔から「海ゆかば水つくしかばね、やまゆかば草むすしかばね、大君（おおきみ）の辺（へ：そば）にこそ死なめ（死のう）」とあるように天皇陛下のために死ぬ、国のために死ぬという覚悟を子供の時からちゃんと持っていました。・・・何時でも大君の御為に命を献げるといふ腹を決めていました。その覚

悟をちゃんと持って、日々の勉強に、働きに、力の限りを尽くすのが献身です。

ガダルカナルで目覚ましい働きをして、いさぎよく戦士をとげた若林中隊長は、自分はこの島で死ぬ。ただし自分の後続く者があるのを信じる。」後続く者とは誰でしょうか。・・・そうです。君たちはすでに皇国日本のために献げられているのです。神風特攻隊の若者達は死ぬと覚悟が出来ると益々訓練に励み、黙々として玉砕する日の準備をしているといいます。私共の身も心も神と国家に献げられているのです。どうか命がけで大君(天皇)のために立派な死に方が出来るようにその支度をしましょう。3月27日の国民座右の銘に次の言葉があります。「総員死方(しにかた)用意」。」！

こんなことが本当にあったのかとショックを覚えました。そして、私たちの信仰、教会の歩みというのが、いかに危ういものか、気を確かに持っていないと、天地万物を造った神の真理でさえも、こんなにゆがめられるものなのか、聖書の言葉が曲解されるものなのか、ありうるのだと考えさせられたのです。



もういいと思いますが、同志社大学を創設した新島襄が、江戸時代の終わりに、漢文で書かれた中国で発行されている聖書を読んで、命がけでアメリカにわたり、神学校を出て、日本に、天地万物を造られた神こそを伝えなければならないと決意したときの、明治の初めの、あの信仰の初心に戻るべき事、しいていえば、今日示されている、世界ではじめて異邦人に福音が伝えられて、天地万物の創造者なるかみをこそ礼拝すべきであると言う神の御心、思いに立ち返るべき事を、エリを正して、あらためて、確認したいと思うのです。



(←函館に立つ、賀川豊彦の銅像)

「元始に神天地を創造りたまえり」
「なるほど、この世界のあらゆるものは、これを造った神さまがいなくてはできないはずだ。机は大工がつくったものだ。その机をつくった大工が用いた材木も、けっして人間が造ったものではない。すると、この書物にあるとおり、この世には真の神さまというものがいて、この天地万物をつくり、ご支配しておられるに

ちがいない」

そう納得した彼は、目には見えないが天地創造者である神を信じたのです。

今日の聖書の箇所にあらためてかえります。

そもそも、この天地万物の説教が宣べられた経緯は、足の不自由な人の癒やしでありました。

「14:8 さてリステラで、足の不自由な人が座っていた。彼は生まれつき足が動かず、これまで一度も歩いたことがなかった。14:9 彼はパウロの話すことに耳を

傾けていた。パウロは彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見て、14:10 大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は飛び上がり、歩き出した。14:11 群衆はパウロが行ったことを見て、声を張り上げ、リカオニア語で「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになった」と言った。」

天地万物を造られた方を伝えると言うことは、すなわち、私たちの肉体を、その手も頭も、足も造られた方を信じるということでもあります。

ここに、その足の作成者、足の創造者であれば、私の足を治せるかも知れないと信じた一人の人の癒やしが書かれていると言っていいのだと思います。一点にだけ、注目します。

「：9・・・パウロは彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見て、」とあります。何をもって、癒されるにふさわしいと言っているのでしょうか。そもそも、ふさわしい信仰とは、癒される資格があるという意味でしょうか、そういう信仰の捉え方はどうだろうか、と、しばらく、疑問に思う箇所でした。パウロがまだ信仰が足りない時代の考えか？とも、思っていました、あらためて読み直して見る時に、なぜ、パウロがそう考えたのかを考える時、その根拠は、その前半部分「14:9 彼はパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼をじっと見つめ・・・」のあることを思うのです。「耳を傾けていた」という事です。

この使徒の働きを書いているルカは、ルカの福音書の時にも宣べましたように、信仰において「聞く」ことの大事さ、人は聞く力によって測られ、信仰は聞くこと、その聞き方によって決まることを強調しているのです。

パウロは、もちろん、私たちの力の及ばない、特別な聖霊の力が与えられていたとは、と思いますが、まずは、神に聞く、信頼して聖書に聞くことによって、ある意味では、それだけで、癒されるにふさわしい信仰が与えられるということでもあるなあと感じたのです。



三村光先生の召天記念礼拝の時、三村牧師が最後に書かれた証しが公表されました。最後にこうありました。「私は今、自分が一日でも長く生きたいとは思いません。それよりも、私のこの人生を通して、神さまの御言葉の真実が、まず教会である皆さんに証され、それを宣べ伝え続けることだけが、今の私の生きる目的です。」と。

今週の歩み。

御言葉に聞き、御言葉に癒され生かされる歩みを、三村先生に続き、いにしえの信仰の先輩達にならい生きる歩みとさせていただきたいと心から願います。